

トクシクメロフ

こねくり回して書いた本なんて理屈ばかりで大した事ないに決まってる。と思ってなんにも考えずに書いたって途中で破たんするに決まってる。と思ったから書けないでいたら締め切りが過ぎたので結局なんにも考えずに書かざるを得なくなったのがこれです。そしたら会心の出来になったので、それ以降の本は毎回ギリギリになるまで書かないでいたら劇団員に怒られるは胃腸は壊すは散々な目に遭ったのでした。もう『トラックメロウ』の事は忘れます。

～東京・長久手公演パンフレットから～

登場人物 男1／添乗員

男2／バスの運転手

客1／ポロシャツのおじさん

客2／メガネを掛けた背広姿の細長い男

客3／大学生くらいの青年

客4／ぽっちゃり体型の主婦

客5／一見中学生男子のように見える女

女／トラックの運転手

駐車場

添乗員の男が、小旗を持ってやってきた。

男1 はい、こちらです。

続いてツアー客が5人。

男1 …えー、皆さんはこれから、岐阜県は飛騨高山に向かいます。えー、飛騨の里には、えー、飛騨の匠と呼ばれる、えー、職人の方がおられます。えー、今回皆さんは、その、飛騨の匠からですね、えー、木彫りの熊とか、犬とか、小鳥とか、えーいろいろな動物の作り方を教えて貰う訳であります。それでは！  
…出発まで今しばらくお待ちください。

ツアー客達 無反応

男1 えー、今回のツアーの案内をさせて頂きます、小久保です。よろしくお願ひします。えー、ちよつと運転手さん。

最後に、運転手が立っている。

男2 はい。

男1 自己紹介を。

男2 あ、はい。運転手の、田中山です。よろしくお願ひします。

ツアー客 無反応

男1 えー、お相撲さんみたいな名前ですが、けつしてそつでない事は体格を見て貰えば分ると思ひます。よろしくお願ひします。それでは！…出発まで今しばらくお待ち下さいませ。

しばらくそのまま。

男1 運転手さん？

男2 はい。

男1 ちよつと。

男2 なんですか？

男1 いや、ちよつと。

男2 はい。

男1 こつちに。

男2 なんですか？

男1 ちよつとこつちに。

男2 こつでも聞こえますけど。

男1 うん、でもこんな所で話してもアレですから、こつちに。

男2 だつてそつち行つたら私、怒られますよね。

男1 うん、怒られるか怒られないかは、あなた次第ですから。

男2 だつてもう怒つてるじゃないですか。

男1 うん、だからそれはね、あなたがこつちに来ないからです。

男2 どうせ怒られるならこつでイイです。

男1 うん、この距離だつてこつしても声を張らないといけないじゃないですか。

男2 ええ。

男1 そうするとき、なんか怒つてるみたいになつちゃうじゃないですか。

男2 はい、怒ってるみたいになってます。

男1 でしょお？

男2 はい。

男1 それはね、声を張ってるよ、怒ってるんじゃないかと勘違いしちゃうんですよ、脳がね。

男2 脳が？

男1 そう、脳が。

男2 はい。

男1 怒ってる時に発する声と、この距離で話す張ってる声とが、似てるからそういう事になる訳であつてね、そうするとね、いくらそういうつもりはなくても、だんだんと張ってる声が荒々しくなつていつちやうんですよ。

男2 はい、なってます。

男1 でしょお？私もね、声を荒げたい訳じゃないんですよ。その気持ちは分かってくれますよね？

男2 わかりません。

男1 おや、なんでかな？

男2 だってもう怒ってますもん。

男1 うん、だからそれは怒ってるみたいに感じさせているだけだから。その感じさせるプロセスについてはもう理解して貰ってるよ、私は思っていたんだけど違ったのかな？勘違いだったのかな？

男2 勘違いです。

男1 ああ、そうなんだ。

男2 はい。

男1 私はね、出来れば平和的に今後の話をしたいだけなんです。

男2 あ、はい。それは、はい。

男1 だからね、いつまでもこんな所に居たつてしょうがない事くらいあなただつてわかつてはるはずですよ、ね？

男2 はい。

男1 うん、だからさ、相談しましょうよ。

男2 はい、します。

男1 うん、だからこつち来て。

男2 でもそつち行つたら私、まずどつかれますよね？

男1 えつとね、

男2 はい。

男1 どつかれるかどつかれないかは、あなた次第ですから。

男2 でも、もつとどつく気で居ますよね？

男1 うん、どつく気で居るんだろ？と思わせてしまうのは、この距離で話しているのが原因なんだという事はさつき言いましたよね？

男2 はい。

男1 だからまずは距離を詰めないとき。

男2 でも距離詰めたら私どつかれますよね？

男1 うん、どつかれるかどつかれないかは、もつとちに来てから確かめて貰うしかないかもしれないね、やつぱり。

男2 そうですか。

男1 うん、それはやつぱりそうだよね。だって幾らどつかないと言ったところで、君は信じないだろうし、私もいざ君の顔が近くに來たらそれはやつぱりどつちちやうかもしれないからさ。

男2 そうですよ。

男1 うん。

男2 じゃあやつぱりここまです。

男1 …じゃあ言うよ。この距離のまま言つちやうけど、イイのね？

男2 はい。

男1 バスのカギ失くしたつてどつちいう事？

ツアー客達、無表情のまま、ゆつくりと運転手の方を向く。

男2 どういう事つて言うのは？

男1 だつて失くしたんだよね？

男2 はい。

男1 どつちやつたの？

男2 さあ？わからないです。

男1 そうだよ、どつちやつたのかわからなくなった事を失くしたつて言うんだから。

男2 はい。

男1 じゃあ、どつちするんですか？

男2 はい。

男1 うん、はいじゃなくて。

男2 とりあえず、内緒にして下さい。

男1 うん、だからさ、(客達を指差し) もう言っちゃったから。

男2 会社に。

男1 うん、会社に言わないでって君が言うから私はこうして皆さんを不安にさせないように頑張ってる間様きをしていた訳なんだけれども、その間君は何をやっていたかという必死にカギを探しているのかと思いきや、そつでもないよね？

男2 はい。

男1 うん、それは何故なのかな？

男2 探しても無いから。

男1 ちゃんと探した？

男2 はい。

男1 じゃあ、無いんだね。

男2 はい、無いです。

男1 だとすると、やっぱり会社に報告して、スペアキーを取りに行かないといけないじゃないですか。

男2 でも会社には内緒にして欲しいです。

男1 うん、でももうそういう訳にはいかなくなってしまったよね？

男2 だって会社に知れたら私、怒られるじゃないですか。

男1 そりゃあ君がカギを失くしたんだから君が怒られるのは当然だよな？

男2 そこが分からないんです。どうして私がカギを失くしたから私が怒られるのは当然なのか。

男1 ……えっだってカギを失くしたのは、君だよな？

男2 はい。

男1 じゃあやっぱり怒られるのは君だと思うよ。

男2 私がカギを失くしたのは結果です。しかしその裏には原因がある訳で、本当に悪いのはその原因を作りました人だと思うんです。

男1 ほお、君がカギを失くした事に、どんな原因があったの？

男2 わかりません。

男1 あ、わからないんだ。

男2 はい。でも、世の中にはそういう原因のわからない不条理な結果がたくさんあると私は思っている

んです。

男1 世の中の事はわからないけれども、カギを失くしたのは君なんだよね。

男2 私の場合、カギを失くしたという事実があるだけで、なぜカギが無くなったのかは誰もわからないという事になります。

男1 ……おつとなんだか訳がわからないけど一応聞こうか。

男2 なぜカギが無くなったのか解らないんだとしたら、私は本当にカギを失くしたんでしょうか。

男1 ……は？

男2 私は本当はカギを失くしてないんじゃないでしょうか。

男1 じゃあどこにあるの？

男2 わかりません。しかしカギを失くした事があるのは私だけじゃないと思うんです。

男1 うん、それはそうかもしれないね。私も失くした事はあるよ、カギ。

男2 ですよ。

男1 でも、それはバスのカギじゃないから、家のカギだから。

男2 本当にそれは家のカギだったんですか？

男1 その強引な話のすり替えは止めて貰えないだろうか。ちょっと無理があるからさ、それは。

男2 そうですね。

男1 そうですね。

「――」

ポケットから携帯電話を取り出すポロシャツのおじさん。

男1 くん、どうしました？

客1 え？

男1 携帯。

客1 充電が。

男1 ああ。

客1 あのお、

男1 はい。

客1 充電機、ありませんか？

男1 えー、どなたか、充電器ありませんでしょうか？

誰も答えない。

男1 無いみたいですね。

客1 …。

男2 私ありますよ。

男1 え？

男2 充電機

男1 あ、そう？

男2 はい。

男1 じゃあなんで今聞いた時返事してくれなかったのかな？

男2 聞かれた後で思い出したんです。

男1 ああ。

男2 そういふ事ってありませんか？

男1 ありますね。

男2 ええ。

男1 じゃあ貸してくれる？

男2 はい。

男1 良かったですね。

男2 (ポケットをもそもそと) あれ？

男1 ん？

男2 あれ？

男1 無いの？

男2 どこやったかな？

男1 それも失くしちゃったの？

男2 ああ、ありました。

男1 (客1に) 良かったですね。

男2 カギが。

男1 え？！バスのカギ？

男2 はい、ここに(胸ポケット)。

男1 そんなどこにあったの？！

男2 はい。

男1 君、ちゃんと探してた？

男2 探しましたよ。えっと充電器は…、

男1 もういいよ、充電器は！

客1 …。

男1 ほら行くよ。待つてるんだよ、飛驒の匠が。

男2 はい。

男2、去る。

男1 はい、お待たせしました。それでは、飛驒の匠による、木彫りの熊とか小鳥とか彫るうツア、  
出発致します。こちらです。

男1を先頭に一列で去っていく一同。

暗転。

バスの中。

とりあえず、椅子を6脚 縦に二列に並べてバスをイメージさせる事しておく。  
男1は立っている。

男1 はい、それでは出発致します。安全運転に努めますが、止むを得ず急ブレーキなどを掛ける場合  
がございます、ご承下さい。えー、それでは…お座り下さい。

客達 座らない。

男1 …どうしました？

客2 あのお？

メガネを掛けた背広姿の細長い男が申し訳無さそうに手を挙げた。

男1 はい。

客2 これ、どこに座ったらいいんですか？

男1 ……あ、えー今回のツアー、座席に余裕がございます。えー、ですので、どうぞお好きなところに座り下さい。

と、言つとツアー客達は椅子を移動させ、文字通り舞台上の好きなところに座ってしまうので、もつバスのイメージも何もあつたものじゃない。

男1 ……はい、出発します。

「ぶーん」

男1 えー、飛騨高山への到着時刻は、午後1時の予定でしたが、大幅に出発が遅れてしまいました事、深くお詫び致します。まあ、私のせいではないのですが。

男2 あのお。

男1 あ、本人からも一言あるそうです。

男2 カーステ掛けてもイイですか？

男1 ……(客達に) 失礼しましたー。

男2 眠くなつてきちゃったんで。

男1 ああ、そう。

男2 はい。

男1 でも今走り出したばかりだからさ、我慢しようか。

男2 昨日寝てないんで。

男1 知らないよそんな事。(客達に) えー、それでは到着までこゆつくりお過ごしください。何かありますたら、なんなりとこの私に仰つてください。出来る限りの対応はさせていただきます。

客1 あのお。

男1 はい。

客1 充電機 無いですか？

男1 ああ…、

男2 (ハンドル放して、ポケットを探る) えつと…、

男1 あ、イイからハンドル持つて。

男2 はい。

男1 あ、ちよつと待つてて貰つてもイイですか？トイレ休憩の時にでも。

客1 今すぐ電源を入れたいんですけど。

男1 今すぐですか？

客1 ええ、もう今すぐに。

男1 あのお、どなたか携帯電話持つてませんか？

客2 あのお？

男1 あ、お持ちですか？

客2 携帯電話、貸して下さい。

男1 え？…あ、あなたも、ですか？

客2 いえ、私は要りません。

男1 ……ん？

客2 私は携帯電話要らないんですけど、携帯電話、貸して下さい。

男1 ……ああ、そういう事ですか。なんて優しいお方だ。申し訳ございませんが、私携帯電話を持つていないんです。

客2 ああ、そうなんですか。

男1 そうなんです。

大学生くらいの青年(客3)と目が合う。

男1 なにか？

客3 あのお？

男1 はい。

客3 携帯電話、貸して下さい。

男1 ……今、携帯電話は持つていないという話をしてたじゃないですか私。

客3 それは本当ですか？

男1 そんな事嘘ついでどうするんですか？私は、携帯電話を持つ事を拒んでいる人間なんです。今の時代みんな携帯電話持つてるじゃないですか。だから私は、人類で最後に携帯電話を持った男になりたい

んです。

客4 あのお？

ぼつちやり体型の主婦が手を挙げた。

男1 あ、はい。

客4 結局は持つんですよね？

男1 はい、結局は持ちます。

客5 はい！

一見中学生男子のように見えるが、実際の所は何歳なのかわからない女が元氣良く挙手。

男1 あ、何か？

客5 携帯電話を貸して下さい。

男1 …あなたも持ってないんですか？

客5 はい。

男1 すいません、「私携帯を持つことを拒んでいる人間なので」、という事を今さっき言ったところなので。

客5 わかりました。

男1 すいません。

客2 あのお？

男1 はい。

客2 運転手さんにも聞いて貰ってイイですか？

男1 …、君携帯どこにある？

男2 私、持ってません。

男1 …え？

男2 はい。

男1 なんて持ってないの？

男2 家に置いて来ちゃったみたいです、ありませんから。

客1 あのお？

男1 はい。

客1 私は別に、携帯電話を貸して欲しい訳じゃないんです。

男1 え、でもどこかに電話したいんじゃない？

客1 私の話聞いてなかったんですか？私は、今すぐ電源を入れたいんです。携帯電話の電源を。

男1 …あ、ああ、そういう事だったんですね。すいません。

客1 どこに電話するって言うんですか？この私がどこに？

男1 …あのお、どなたかこの方に充電器を貸してもイイと言う方、いらつしやいますか？

皆、無反応。

客1 (立ち上がり) 降ります。

男1 え？

客1 降りして下さい。

男1 いや、ここ高速道路ですから。

客1 さっきから聞いていると、ここに居る人誰も携帯電話持つてないじゃないですか。こんなに人が居て、今時誰も携帯電話持つてないなんてそんなおかしい話がありますか？そんなに皆人類で最後に携帯

電話を持った人間になりたいんですかね？どうも信じられなくて。

男1 皆さん！本当に携帯電話持つてないんですか？我々は同じツアアの参加者じゃないですか。助け合っ

客4、手を挙げる。

男1 ふー、持つてるんじゃないですか。

客4 デジカメならあるんですけど…。

男1 あ、デジカメならあるそうですよ！

客1 デジカメ持つてるからなんですか？

男1 …。(客4に) デジカメ持つてるからなんですか？我々は全携帯電話を探しているんですよ。

客1 もついいです。トイレ休憩まで待ちます(座る)。

男1 そうですか、なんかすいません。

客4 …私は、もしかしたら写真が撮りたいのかと。



男1 え？

客4 今の携帯電話は大抵カメラが付いてますから。電話を掛けたい訳じゃなく、電源が入れたという事でしたのでそういう事かなど。

男1 …ああ。

客4 すいませんでした。

男1 …あ、こちらこそなんか…、すいません。

客5 あのお！

男1 はい？

客5 雪が降って来ました！

男1 (前方を見て) あ、ホントですね！降って来ましたね。

客5 私、雪を見たことが無いんです。

男1 あ、そうなんですか。じゃあ見れましたね。

客5 はい！

男1 あなたの記念すべき日に立ち会えて、私も嬉しいです。

客5 ありがとう。

男1 いえいえ。

客5 ところで、

男1 はい。

客5 これは本当に雪ですか？

男1 え？

客5 私、雪を見たことが無いのに、これを見た瞬間に雪だと思ったんです。でもそれって間違ってるんじゃないかと思ひまして。それってなんだかちよつと怖い事なんじゃないかと思ひました。なんというか、情報社会に騙されているんじゃないかという恐怖感です。

男1 …なるほど。

客5 はい。

男1 でも大丈夫ですよ、私は雪を見たことがあります、これは間違いなく雪です。

客5 わかりました。

客3 あのお、

男1 はい。

客3 こっちにも雪が降って来ました。

男1 …、あ、そうなんですか。

客3 はい。

男1 そりゃあ、あっちこっちに降りますよねこの範囲だったら。

客3 そうですか。

男1 え、もしかしてあなたも雪を見たことが無いんですか？

客3 いえ、毎年ボードに行ったりはします。

男1 そうなんですか。

客3 はい。

男1 じゃあ雪というのがピンポイントに降るのではなく、あっちこっちに散らばって降る事くらい知ってますよね？

客3 はい。

男1 じゃあ黙って下さいね。

客3 さっき何かあつたら仰ってくれと言っていたので。

男1 はい、それは確かに言いました。でも報告は結構です。雪が降ってきたことは私にもわかりますので。

客3 言いたかったです。

男1 そんな子供みたいな事言わないで下さいね。

客3 虹を見つけた時、一人しかいなくても「あ、虹」って言いたいです、僕

男1 わかりますよその気持ちは。じゃあ独り言でいいじゃないですか。わざわざ私に報告しなくても。

客2 すいません。

男1 はい、何か？

客2 雪が降って来ましたよ。

男1 …知ってます。今ちよつどそういう話をしていたところですから。

客2 そうなんですか。

男1 ええ、でもわかりますよ。言いたいですよね、子供みたいに。

客2 そうなんですか。

男1 は？聞いてます？

客5 あのお。

男1 はい。

客5 ホワイトクリスマスですか？

男1 クリスマスじゃあないです、今日は。

客5 はい。

男1 言っておきますが、雪が降ったらクリスマスだというのは大きな間違いです。

客5 わかりました。

客4 (手を挙げて) はい、先生。

男1 私は先生じゃないですけど何ですか？雪が降って来たんですか？

客4 はい。

男1 そうですか。

男2 あのお。

男1 なに？！(急に名古屋弁)

男2 雪が降ってきたんですけど。

男1 知つとるて！今ひとしきりこつちで盛り上がつたところだがや。盛り上がったかどうか知らんけど。

男1は興奮すると名古屋弁になるみたいです。

男1 ていうか雪が降って来たからなんだて！

男2 カーステ掛けてもイイですか？

男1 なんて雪降ってきたらカーステなんだて、意味わからんがや！

皆、横目で男1を見る。

男1 …(咳払い)、お休みになられる方も居ると思いますのでね。

客2 …あのお、

男1 はい、何か？

客2 私は、眠れないと思います。

男1 ああ、そうですか。

客2 はい。

男2 じゃあ、掛けますね。

客3 あ、

男1 はい。

客3 僕は、眠りません。

男1 …えっと、それは音楽を掛けても、イイという事ですか？

客5 はい！

男1 どうぞ。

客5 私は、音楽を掛けてもイイと思うんですけど。

男1 あ、そう。

客1 あ、

男1 はい。

客1 私なら、トイレ休憩までなら掛けてもイイと言いますがね。

客4 あのお、

男1 どうぞ。

客4 でも私は音楽を掛けるのは反対ではないです。

男1 あのですね皆さん、人の話はちゃんと聞きましょう。皆さんさつきからずっと同じ事を言ってますからね。一人が言った事をいちいち反復しなくても、同意でしたら心の中で思ってくれたりそれでいいですから。今の話を集約しますとね、音楽を掛けてもイイと言つことになってますけど、それよろしいですか？

客達 無反応。

男1 …なんでそこはなんにも言わんのだて。

男2 じゃあ掛けまーす。

男2、カーステのスイッチを押すと、

男2 ♪おーぶれねり、あなたのか

男1 …お前が唄うんか。

続いて客1、客2と、どんどん歌う人が増えて行き

「おーブレネリ」の輪唱になる。

いよいよ残るは男1、歌い出そうとしたところで

男2、急ハンドルを切る！ 「キイキイイーガシヤンー！」  
ガードレールにぶつかった。

男1 ……何？どうしたの？何があったの？

男2 いえ…。

男2、エンジンを掛ける。

「キュルキュルキュルキュル…、キュルキュルキュルキュル…」

男2 掛かりません。

男1 うん、だで何があったんだて？

男2 ぶつかりました。

男1 知つとるて。

男2 はい。

男1 だからそれはなんで？

男2 猫を、

男1 猫？

男2 白い猫

男1 うん。

男2 あ、黒かったかもしれません。

男1 白でも黒でもどつちでもいいけど、猫が何？

男2 轢いちゃいました。

男1 ……うん、でも猫轢いちゃうくらいで、事故ったりはしないですよ。

男2 今、なんて言いました？

男1 ……は？

男2 猫の事はどつてもいいと？

男1 ……だつてそれよりも我々の、いやお客様の身の安全の方が大事ですよ。

男2 じゃあ猫は轢いてもイイって言うんですか？

男1 あのね、こんな時に君と猫の事で言い争っている暇はないんだ。ちょっと、あの、会社に連絡して。

男2 ネコは、轢いても良いんですか？

男1 あ、携帯持っていないのか…、あのお、どなたか携帯電話持ってませんか？

ツアー客、無反応。

男1 あ…。あのお、ちょっと待って下さい。ここ高速道路ですから、緊急連絡用の電話ボックスがあるはずなんです。

男1、バスから降りる。

男1 うー、寒いなあ…。

気づくと、男1の後ろから客達が付いてきている。

男1 あ、どうしました？待って下さい。すぐ、連絡取りますから。

誰も答えない。

男1 あの、席に着いて待って下さい。寒いですから。

客達、空を見上げている。

男1 あ、雪を見てるんですか…？あの、ここ高速道路ですから、危ないですから、バスに。

男2もいつの間にか降りていて、ゴミ袋を持ってきた。

男2 猫じゃなかったみたいです。

男1 ……え？

男2 猫かと思つたらコレでした。しかも白でも黒でもなく、普通の燃えるゴミの袋。ははは、笑っちゃいますよね。透明の燃えるゴミ袋を猫と見間違ふなんて。あはは。

男1 …笑つてる場合じゃねえだろ。

男2 いやあ、良かったです。

男1 …君さ、緊急連絡用の電話ボックス、見なかった？

男2 さあ、見てないですねえ。

男1 私、この先に行つてみるから、君は戻つて探してみて。

男2 嫌です。

男1 …え？

男2 私、ここで待ってます。

男1 …、うわ、危なかったよ今。私、もう少しで君の首を絞めてたところだ。

男2 ここで待つてたら、車を通るかもしれないです。

男1 …ああ、なるほどね。

男2、バスに戻る。

男1 じゃあ、戻りましょうかね？寒いですからね。

皆、バスの中へ。

男1 ちよつと、君…ちよつと！

男2 私ですか？

男1 …君なんでそんなところに座つてるの？

男2、最後部席に座っている。

男2 え？

男1 え、じゃなくてさ。

男2 だつてこのバス、もう動かないですから。

男1 うん、でも君は運転手だよね？

男2 ええ、でも私がそこに座つても、このバスは動きませんから。

男1 おい、そういう問題じゃねえだろ。

男2 私が運転席に座ろうが座るまいが、このバスは動かないなら、私はここに座つていたいです。

男1 座つていたいって言われてもさ…

男2 だつてそつち行つたら私、怒られますよね。

男1 うん怒られるか怒られないかは君次第ですから。

男2 だつてもう怒つてるじゃないですか。

男1 うんだからそれは君がこつちに来ないからですよ。

男2 どうせ怒られるならここでイイです。

男1 だからこの距離だとどうしても声を張らないといけないじゃないですか？さうするとなんか怒つてる

みたいになつちゃうじゃないですか！…さつきもやったよ、このやりとり！

男2 そうですか。

男1 …、君さ、運転手でしょ。

男2 はい。

男1 私は添乗員。

男2 はい。

男1 あなた運転手、私添乗員。

男2 はい。

男1 同じ旅行会社に勤める者としてね、責任というかさ、お客さまの安全を第一に考えて、こんな時に  
そのお客様自身に考えて貰う訳にはいけませんから、

客達、男1を見ている。

男1 そこはやつぱり私達が考えないといけないだろうっていう目をね、私はずーっと向けられている訳  
ですよ。

男2 はい。

男1 なんで私はばかり考えなくちゃいけないのか。元はと言えば君が悪いのに、なんで私はばかり考え  
なきゃいけないんですか！…とね、声を荒げてしまつたんですね、この距離だとね。

男2 元はと言えば私が悪い、というのは違つと思ひます。

男1 おや、それはどういう事かな？だつて君事故つたじゃん。それでバス動かなくなつちやつたじゃん。

男2 事故つたんじゃないです。高速道路のフェンスにぶつかったんです。

男1 うんだから、世間一般的にはそれを事故つたつて言うんだよね？（客達に）そうですよね？

客達、無反応。

男1 ですよええー？

男2 なんで高速道路のフェンスにぶつかっただかと言つと、

男1 うん、速く喋ってくれないかな。イライラしちゃってしょうがないんだよね、ごめんね。

男2 猫が、

男1 うん、それはゴミ袋だったじゃないですか。

男2 ええですから、元はと言えば私が悪いのではなく、そのゴミ袋が悪いと思うんです。

男1 うんだから、ゴミ袋を猫と間違えてハンドル操作を誤った君が悪いんだよね。

男2 いえ、ゴミ袋を猫と間違えてしまうような、そんな猫が悪いと思うんです。あるいは、こんな所に猫が居るかもしれないと思わせてしまっている飼い主が悪いんです。もしそれがのら猫だったとしたら、のら猫が入って来てしまおうと思わせるような高速道路を作った高速道路会社が悪いんです。その高速道路を民営化したと言いなから、実際はその高速道路を食い物にしている道路族と呼ばれる政治家が悪いんです。そんな政治家を選んでしまった、国民が悪いんです。つまりあなたが悪いんです。

男1 ……

男2 という事です。

男1 ……これは困ったことになりましたぞ。とんだ運転手に当たってしまった。皆さん、今回のツアーは、ハズレです！すいませんね、なんか、という事で、私は、添乗員を辞めます。こんな旅行会社、辞めてやる！

男1、小旗を車外へ抛り捨てる。

客達、無反応。

男1 というのは嘘で…、嘘です。嘘ですよおー。びっくりしましたっだってここでね、私が仕事を投げ出してしまったら、あんな訳のわからない運転手しか居なくなってしまうんですから、そんなひどい事は出来ませんよお。私が、皆さんを安全に、安全かつ快適に、送り届けてあげますから、安心して下さい！

男2、その間に運転席に戻って来て、「ガチャ」カギを締める。

男1 (バスに乗ろうとして) あれ、ちよつとーおい！なにカギ締めたんだ！おい！こら…あー、さぶ

いーちよつとー！

男2 だってカギ開けたら私、どつかれますよね？

男1 うん、どつくかどつくかは開けてみてからの話だからさ！

男2 結局どつくんじゃないですか。

男1 いや、どつかない！もうどつかないから開けて！

男2 私だってこんな事したくないんです、こんな事。

男1 わかったから、もうどつくなんて言わないから、ね。さぶい！

まず客2が立ちあがる。続いて他の客達も。

そして、バスのドアを開けた。

「ガチャ」

男1 ……え？

客2 ……ケンカは、止めて下さい。みんな、このツアーを楽しみにして来たんです。

客達、男1を見ている。

男1 はい…。

皆、席に戻る。

男1、バスに乗り込み、すぐ男2に、

男1 てめえこの野郎…。

男2 ケンカは止めて下さい、との事です。

男1、客達を見直し、

男1、バスを降り、小旗を拾いに行く。

男1 ……が楽しみなんだ、こんなツアーの！

男1、手に持っていたパンフレットを引き裂いた。  
暗転。

辺りには少し雪が積もっている。

男1、寒さに震えながら、

男1 車、ちつとも通らんじゃないか…。

男2 通りませんね。

男1 皆さーん、大丈夫ですかあ？寒くないですかあ？

客達、無反応。

「キュルキュルキュルキュル…、キュルキュルキュルキュル…」

男1 掛からない？

男2 ええ。

男1 せめてエアコンでもつけてくれたらね。

男2 ええ、付かないですね。

男1 そう。

男2 カーステ。

男1 ……うん、カーステはイイんじゃないかな？

男2 歌でも唄えば、気が紛れるんじゃないかと思ってます。

男1 なるほどね…。あ、じゃあどうですか皆さん、しりとりでもしませんか？ね、しりとり。じゃあ私から行きますね、しりとり「し」…「は」。

客1 りんご屋。

男1 ……りんごで良いんですけどね。まあいいや、じゃあ、りんご屋の「や」！

客2 焼肉屋。

男1 ……焼肉、だけで良いんですけどね。じゃあ、焼肉屋の「や」！

客3 焼き鳥屋。

男1 ……えー焼き鳥屋の「や」。

客4 やきいも屋。

男1 はい「や」。

客5 やきそば屋。

男1 ……。

男2 焼き魚屋。

男1 あのお皆さん、別にナニナニ屋ってつけなくてもいいんですけどね。そしたらなんでも「屋」をつければ良いことになっちゃいますから。

客5 あー！

男1 はい。

客5 焼き魚屋というのは、どこにあるんですか？

男1 ……どこにあるの？

男2 さあ？

男1 あのお、無いと思います。

客5 無いんですか？

男1 ええ。

客5 わかりました。

男2 確かに焼き魚屋なんて聞いた事ないですね。

男1 じゃあなんと言ったんだて？

客4 あのお？

男1 はい。

客4 焼き魚を売りにしているお店は、定食屋に分類されるんじゃないでしょうか。

男2 私も定食屋だと思っただんです。でも、頭の文字が「や」だったから仕方なく。

男1 そりゃあ皆ナニナニ屋ってするからね、

客3 あのお、

男1 はい。

客3 このしりとりはお腹が空いて来るので止めてください。

男1 いやだからナニナニ屋ってするからね…。

客3 お願いします。

男1 あのお皆さんね、ナニナニ屋はっかだと、しりとりがつまらなくなっちゃいますから。そしてたい

てい何かを焼きますから。焼き物屋ばかりだと、お腹も空いて来ちゃいますし。

客1 あの、

男1 はい。

客1 充電機を、貸して下さい。

男1 あ、そうですね！充電機があれば電話が掛けられる。おい、

男2 はい。

男1 充電機

男2 ありません。

男1 …は？君さっきあるって言ったじゃん。

男2 持ってませんでした。

男1 え、なんで？

男2 忘れて来たみたいですが、ありませんから。

男1 ちゃんと探した？

男2 はい。

男1 もっとよおく探してみてよ。さっきだつてポケットからヒョイツと出てきたがね。

男2 でも無いと思います。

男1 いや、思いますじゃなくてさ、

男2 携帯電話を忘れてきたのに充電機だけ持って来ても意味無いですからね。

客1 私、降りますね。

男1 いや、ちよつと待って下さい。おい！

客4 あのお

男1 はい。

客4 ここ、ホントに高速道路なんですか？

男1 え？

客4 ちつとも車が通りませんけど。

男1 ええ、ですが我々は高速道路に乗って飛騨高山に向かっていたのです。それはそういう風にルート

があらかじめ決まっていた事ですから。

客4 はあ。

男1 ですからここは高速道路に間違いありません。

客4 でも全然車が通りませんけど。

男1 まあ平日ですからね。

客2 あの、イイですか？

男1 あ、はい。

客2 この辺りに民家は無いですか？

男1 私に聞かれても、私はこの辺りの住民ではないので、

客2 民家を探しに行った方が早いような気がしますけど。

男1 あ、確かにそうですねえ、でも、

客2 …でも、私の言うことなのでどうせ間違ってますから、聞かなかったことにして下さい。

男1 …なんでそんな卑屈なんですか。

男1 …なんでそんな卑屈なんですか。

男2 ポケットに軽く手を入れた男2が、

男1 なに？

男2 ありました、充電器。

男1 え？！

男2 ここに。

男1 …ねえ君さ、ちゃんと探してお願いだから。

男2 探そうと思つて見つかからないんですよ、探し物という奴は。

男1 もう君と話してるとどうにかなつてしまひそうだ。さ、ありましたよ充電器！

客1 ああ、これで電源が入られる。

客1、携帯に充電器を差し込む。

客2 あの、

男1 どうですか？

客2 コンセントはどこですか？

男1 …おい、コンセントどこ？

男2 え、あるんですか？バスにコンセントが。

男1 ……

客4 あのお

男1 ……はい。

客4 うちの車にはありません。

男1 あなたの車にあってもね…

客4 ですがエンジン掛けないと付きません。

男1 ……

男2 そりゃあそつですよ。

客1 あのと、

男1 ……はい。

客1 お返しします。

男1 ……はい。

客5 あのと、

男1 はい？

客5 寒くなってきました。

男1 ええ、寒くなってきましたね。

客1 すいません。

男1 はい。

客1 じゃあ降ります。

男1 いや、ちよつと待って下さい。

客4 あのお

男1 はい。

客4 やつぱりここは高速道路なんでしょうか？

男1 うん、ですから、

客3 あのと、

男1 もう皆さん！いちいち私に許可取らなくていいですから、勝手に喋って下さい！！

皆 固まる。

男1 ……、すいません。はい、何か？

客3 ここは高速道路じゃないと思います。

男1 えーつと、それはどうしてですか？

客3 なんとなくです。

男1 なんとなくですか？

客3 はい。

男1 なんとなくの発言は控えて頂きたい。

客4 あのお、

男1 はい。

客4 運転手さんは、どう思っているんでしょうか？

男1 え？

客4 運転手さんは、ここが高速道路だと思って運転しているんでしょうか？

男1 ……おい。

男2 はい。

男1 君、まさかとは思うけど…

男2 はい？

男1 ここ、高速道路じゃないの？

男2 そんなの決まってるじゃないですか、

男1 だよな。客4に、だ、そうです。

男2 はい、高速道路じゃありません。

男1 ……、今なんて言った？

男2 高速道路じゃありません。

男1 ……どうして高速道路じゃないの？

男2 まだ乗ってないですから。

男1 うん、だからなんで乗ってないの？

男2 動かなくなっちゃったので、バス。

男1 うん、私が言ってるのは動かなくなる前の話。だって出発してすぐに、高速に乗る予定だったよね？

男2 はい、その予定でした。

男1 うん、だからなんで乗ってないの？

男2 道に迷ってしまいました。

男1 ……道に、迷った？



男2 はい。

男1 だって出発してからまたそんなに走ってないよね？

男2 はい。

男1 うん。

男2 出発してすぐ道に迷ってしまったんです。出発して駐車場を出た道を、左に行けば良かったのに、

右に曲がったのが失敗でした。

男1 それ、ド頭の話じゃん。

男2 だからすぐについて言ってるじゃないですか。

男1 …君はさ、

男2 はい。

男1 どうしてそれをその時言わないの？

男2 だって、怒られるじゃないですか。

男1 うん、怒られる怒られないの話じゃないと思うんだよね。というか君、怒られることから逃げ過ぎ

だよ。ダメだよそういうの。

男2 このまま行っても乗れるんじゃないかと思っただんです、高速。

男1 うん、でも乗れなかったよね？

男2 乗れませんでした。

男1 …え、何？君はずっと迷いながら運転してたの？

男2 ええ、なので動揺を悟られないように唄ったりしてたんです。

男1 そのお陰で事故とついたら世話ねえがや。

男2 違います、そのお陰で事故つたんじゃない、猫を轢いたと思っただんです。

男1 うん、ゴミ袋ね。

男2 はい、振り返ってみれば。

男1 じゃあ何？ここは高速道路じゃないんだ。

男2 はい。

男1 じゃあどこなの？

男2 わかりません。

男1 …えー、皆さん、これは大変な事になっていきます。我々は、今どこにいるのかもわからず、そして

外は雪が降っています。エンジンも掛かりません。携帯電話もありません。助けを呼ぶにも手段が無い状況です。えー、私もあのまま緊急連絡用の電話ボックスを探しにいかなくてホント良かったです。だ

って幾ら歩いてそんなもの無いんですから危うく遭難するところでした。皆さん落ちて下さい。

落ちて、今後の方針を話し合いますよ。

客2 はい。

男1 どうぞ。

客2 この辺りに民家は無いですかね？

男1 そうですね、いよいよ民家を探した方がいいかもしれませんね。

客2 出発してからまだそれほど遠くには来ていないとは思っています。ですがそれも私の意見なのでどう

せ聞運つてくれると思うので聞かなかったことにしてください。

男1 いや、あなたの言う通りですよ！いくら見渡す限り何も無い木ばかりの景色とは言え、方向が分か

らなくなるほどの山奥ではないはずですよ。皆さん、さあ行きましょー！

客4 あのお、

男1 はい。

客4 皆で行くんですか？

男1 ああ、そうですね…、全員で行く必要はないですね。ここは男性の皆さん、手分けしてよろしくお

願います。

客1 ああ、

男1 はい。

客1 民家に辿り着いた人は、助けを呼ばいいんですよね？

男1 そうですね。

客1 民家に辿り着けなかった人は、どうなるんですか？

問。

男1 …、わかりました。じゃあ私と、おい、

男2 はい？

男1 二人で行って来ますので、

客3 でも、

男1 はい。

客3 あ、すいません、イイですか(手を挙げる)？

男1 ええ、もう皆さんぎっくりばんに喋って貰って結構ですから。非常事態ですし。

客3 お二人は民家に辿り着けないと思います。

男1 …おつとうそれは随分不吉な事をおっしゃいますね。どうしてそう思っんですか？

客3 なんとなくです。

男1 なんとなくで喋るのホント止めて下さいね。

客2 はい。

男1 はい。

客2 確かに、お二人が民家に辿り着けない可能性だってありますよね？

男1 …まあ、そうですね。

客2 我々はこので待っていて、お二人が民家に辿り着いたか着いていないのかわからないまま待ち続けるのですか？

男1 …じゃあ、こうしましょう。夜になって助けが来なければ、どなたかがまた、民家を探しに出掛けるというのは。

客5 はい！

男1 はい。

客5 あなたは私達を見捨てるのですか？

男1 いや、そうじゃありません。夜になっても救助が来ないという事は、我々はまた民家に辿り着いてはいないという事です。

客5 その場合、お二人はどうなるんですか？

男1 …民家に辿り着ければ幸いですし、辿り着かなければ…

客5 死ぬんですか？

男1 …まあこの雪ですし、最悪そうなるでしょうね。

客5 わかりました。

男1 …でも、きつと見つかりますから、大丈夫ですよ。だってそんな山奥じゃないんですから。心配しないうで下さい。

客5 はい！

男1 …いや、ちよつとは心配して下さい。

客5 わかりました。

男1 じゃあ…、行ってきます。

客達、無反応。

男1 (バスから降りようとして) おい、

男2 はい？

男1 行くぞ。

男2 え？

男1 え、じゃなくて、行きますよ。

男2 いや、私は行きませんよ。

男1 …ん？どうして？

男2 どうして私が行かなくちゃいけないんですか？

男1 だって誰が行かないとしようがないでしょ。

男2 誰かが行かなくちゃいけないなら、私じゃなくてもいいと思います。だって死ぬかもしれないですよ？

男1 …うん、でもそれは最悪の場合だからね。まず大丈夫だと思うから。

男2 大丈夫だと思うても、大丈夫じゃない目に遭った人が居る事くらい知ってます、ニュースや新聞で。

男1 まあ、そりゃあね。この雪だしね。

客4 あ、

男1 はい？

客4 どんどん降って来ます。

男1 そうですね。

客4 はい。

男2 無理だと思っんです、私とあなたが探しに行っても、絶対民家なんか見つからないと思います。

男1 君はなんでそういうマイナスな事言うのかな。

男2 そんなに運良く無いですから。

男1 うーん、

男2 あなたは。

男1 …うん、確かにね、運が良かったら君なんかのバスに乗ってないよ。でもね、こんな事お客様には頼めないでしょう？

男2 じゃあ私の意見も聞いて下さい。

男1 だって聞いたら君、嫌だって言うでしょ。

男2 聞いてもいないのに決めないで下さい。

男1 じゃあ聞いたら良かったの？

男2 はい。

男1 じゃあ一緒に行つてくれる？

男2 嫌です。

男1 ほら。ほれみろ！

男2 だってこの雪ですよ、絶対死にます。

男1 死ぬ死ぬ言わんといてくれる？

客1 あのお

男1 はい。

客1 じゃあ、私行きますよ。

男1 …え？

客1 私、行つてきますから。

男1 …そんな、良いんですか？

客1 はい。

客1、バスから降りようとする。

男1 ありがとうございます！

客3 すいません。

男1 はい。

客3 その人 民家に辿り着いたら、助けを呼んでくれるんでしょうか？

男1 …え？

客3 一人だけ、逃げそうな気がします。

男1 なんて事言うんですか！せつかく言つてくれているのに。

客3 もちろん、なんとなくてすけど。

男1 なんとなくて人を不快にさせないで下さい！

客1 あのお、イイですか？

男1 あ、すいませんねえ、なんか…。

客1 私は、そんな薄情な男に見えますか？

男1 いえ全然。むしろ、悪と戦う勇者に見えます。

客1 そうですか…。

男1 はい！

客1 あなたの眼は節穴です。

男1 え？

客1 私は清廉潔白な人間ではありません。私の心の中は腐っています。自慢じゃありませんが、私の人間関係は最悪です。人を不快にさせることにかけては私の右に出るものは居ません。彼の不快なんて私に比べれば爽快な方です。私と話す人は、必ず私を嫌いになり、それに輪を掛けて私も相手を嫌いになります。

男1 …いや、そんな事ないと思いますよお。

客1 気休めはよして下さい。私は別にそれでイイと思つています。人間社会なんてみんなそんなものです。どいつもこいつも腐つてますから、期待してもしょうがないです。ですから私に期待しないで下さい。彼の言うとおりに、私は民家に辿り着いても助けなんて呼ぶつもりはありません。なぜなら私はあの人が嫌いだからです。あの人が私を嫌いだと思つても何倍も、私は嫌いだからです。

男1 …。

客1 では、失礼します。

男2 ちよつと待ちな。

客1 はい。

男2 あんた自分の事を世界で一番腐つているみたいな言い方をするが、勘違いしないで貰いたい。この世の中で一番腐つているのは私だ。イイですか、あなたが私を嫌つその何百、何千、何万倍も、私はあなたを嫌つていますよ。

客1 …。

男1 そおですよ、あなたなんかまたまた腐つてないですよ！こいつの方がよっぽどです。我々をこんなひどい目に遭わせておいて、一言も謝らうとしないんですよ！こいつは！それどころか、自分の正当性ばかりを主張する。私はこの男ほどこの世に無用な人間には会つたことがない。

男2 添乗員さん、それは言つちやいけない。この世に無用な人間など存在しない！

男1 …、お前が言つな！

客4 (手を挙げて) はい。

男1 あ、はい。

客4 だったらやっぱり皆で行くしかないんじゃないでしょうか。誰も信用出来ないんだから、皆腐つてるんですから。

男1 いや、別に腐ってるなんて言っていないですからね。

客2 あの、

男1 はい。

客2 (立ち上がり) 言ってください。

男1 え？

客2 私にも、お前は腐ってるって。

男1 …いや、え？

客2 今の話を聞いていると、私だけ腐ってないって言われているような気がするんです。

男1 うん、別にそんな事はないと思いますよ。

客2 私だって、人一倍腐っていたんです。

男1 あのお、腐ってる自慢をしている訳ではないんですけどね。

男2 大丈夫ですよ、あなただって十分腐ってます。もう腐って腐って変色してます。

客2 それはひどいです…(頭を抱え座る)。

男1 …こういう集まりなんだ…これは。

客5 (手を挙げて) はい！

男1 …どうぞ。

客5 今、窓を開けてみました。

男1 なんて開けるんですか？

客5 すると外と中、あんまり変わらないくらい寒いです。

男1 そうですね、もうほとんど変わらないですね。

客5 はい。

男1 でも開けないで下さいね、雪が入って来ますから。

客5 わかりました。

男1 …じゃあ、行きますか、全員で。ね？

客達、無反応。

男1 どうしてこういう時は何も喋らないんですか？どうして決断を私に委ねるんですか…？

客達 …。

男1 もっ…。

と、後方から大型トラックのクラクションが鳴り響いた。

男1 …え？

「ブブー！」 トラックが近づいてきた。

男1 あ…、ああ…、皆さん！車ですよ、車ですよ！おい！

男1、トラックの方に駆けよると運転手の女が運転席に座ったまま顔を出した。

これもとちあえず、大きな脚立の上に乗っているつもりで書いている。

女 …はい？

男1 助かったあ。もうダメかと思いましたよ。我々は今から飛騨高山に行つて、飛騨の匠に木彫りの熊とか小鳥とかの作り方を教えて貰う為に向かっているバスツアーの者です。

女 木彫りの？

男1 ところがバスが動かなくなつてしまつて、ほとんど困り果ててしまつていたんです。でも良かったあ。皆さん、助かりましたよ。

皆、ぞろぞろと男1の元へ。

男1 本当にありがとうございます。あなたは命の恩人です。

女 はあ…。(バスを見る)。

男1 実はあのバス、もう動かないんです。ガードレールにぶつかつてしまつて。

女 ガード…レール？

男1 いやはや全でガードレールにぶつかるといふのはどういう事なんですかね？ガードレールはレールをガードする為の物だというのに。(男2に) お前だよ、ちゃんと聞いてよ。

女 …。(バスを見ている)。

男1 見ろ、ガードレールは喧嘩を売る相手じゃない、命を守つてくれるものだ。そうおっしゃっているんだこの方は、そこを忘れちゃいかんのですよ。(女に) こいつはですね、人類史上最底の運転手です

からね、気をつけて下さいね。

女 あのお…

男1 さつそくですが、町まで乗せて行って貰えませんか？あれだったら私一人だけでもいいです、助けを呼べればそれで。

女 えつと…

男1 ありがとうございますーじゃあ皆さん、待っていて下さいね。

女 (時計を見る)。

男1、助手席のドアに手を掛ける。

女 ……

男1 あ、すみません。私とした事が気ばかり急いでしまつて。あなたが女性だという事をすっかり忘れていた。

客5 はい！

男1 はい。

客5 女性のトラック野郎なんてかっこいいと思います。

男1 そうですよ。でもこの方は女性ですから、野郎ではないですね。

客5 わかりました。

男1 でもホント、女性の細腕でこんな大型トラックを運転するなんて尊敬します。日本全国津々浦々、荷物を運んでらっしゃるんですね。

女 …… (時計を見る)。

男1 ああ、急いでいるんですね、わかりますよ。わかります。我々も、このままでは凍え死んでしまいます。さ、乗せて下さい私を。

男2 あの、

男1 なんだね、私は今忙しいんだ、君に構っている暇はない。さあ、よろしくお願いします。

男2 この人は、バスをどけて欲しいんじゃないですかね？

男1 は？

男2 このままだとバスが道を塞いで進めませんから。

男1 え？

女、前方を見て、指で間隔を測ったりしている。

男2 ほら、バスをどけて欲しいんじゃないですかね？

男1 あのな、バスをどけるなんて無理に決まってるじゃないか。大丈夫です！皆さん、私が必ず助けを呼んで来ますからね。

男2 ほら、困った顔をしている。

男1 わかつてますよ。でもしょうがないでしょう、あのバスは動かないんですから。だいたいたったこれだけの人数に、あんな大きなバスを走らす事もなかったんだ。まさに資源の無駄遣いだよ。

女 …… (後方を見る)。

男1 あ、そうですね、この道の幅だと、しばらくバックで進まないといけないでしょうね。皆さん、ちよつと後方を見てあげて下さい。

客達 見ている。

男1 轆かれないように注意して、危険な時は声を上げて下さいねー！

「び、び、び、バツ…バツ…バツ…び、び、び、び、び、バツ…バツ…す…」 途切れ途切れのアナウンスが流れる。

動かない。

男2 あのお、

男1 なんだいうるさいなあ。

男2 ちつともバックしません。

男1 雪道ですから慎重になつておられるんです、黙って下さいよ君は。どうぞー。

男2 それにひどく錆びついたアナウンスです。

男1 それはですね、この方はバックをほとんど使わないんですな。きつと運転が上手なんです。バックをしないという事はつまり、予測行動の正確さと、誰かさんのように道に迷つたりもしないという事です。良かったですね皆さん、我々は地獄で天使に会いましたよ！

男2 あのお、

男1 オーライ、オーライ！

男2 一向にバックしません。

男1 さ、どうぞー、あんな奴隷殺してしまつていいですか。オーライ！

男2 もしかしたらこの人、バックが苦手なんじゃないですか？

男1 コラー女性に対してバックが苦手とか言うんじゃないよ、失礼じゃないか君は！

アナウンス、止まる。

女 … (恥ずかしそうにうつむく)。

男1 あー、すいませんね、あいつはホントにデリカシーの無い人間でした。わかりました、もうバックとか結構です。あなた様がバックをしなくても済むように、我々がバスを脇に押ししますんで。さあ皆さん、一生懸命バスを脇に押ししてみましようー！なんなら押しするだけで構いません。我々だって力を合わせればなんとかなるはずですよ！「我々だって力を合わせればなんとかなるはずだ」というところだけでも見せてやるのです！

皆 あつさりバス(椅子)を脇へ寄せる。

男1 はい、出来ました。これでもうあなた様はバックをしなくて良くなりました。良かったですね。じやあよろしくお願ひします！

「おおん、どうもどうも…」

男1 あ、ストップ、ストップー！また乗ってません。どこに乗ったらいいですか？

女 … (時計を見る)。

男1 危なかったですよおっもっ少しで轢かれるところでしたよおっははは。さあ、どこに乗ったらいいですか？荷台ですか？

女1 あ、ああ…。

客1 荷物が一杯なんじゃないですか？

男1 はあ？そんなまさか、こんなに大きなトラックなんですよ。私一人座るスペースくらいあるでしょう。

客3 あのお

男1 はい？

客3 何を乗せてるんですか？

男1 あのお、何を乗せてるんですか？と、この若者が。

女 … (何やらメモを手取る)。

男1 この方はただの運送屋なんだ、中身が何かなんて知らないんだよ。だつてそうだと、運送屋がいちいち中身を確認して運ぶ訳じゃないか。それでそのプロの仕事だよ。

客3 でもこんなに大きなトラックですか？

男1 そうですよ。あ、そんなにギョウギウ詰めなんですか？

客5 はい！

男1 どうぞ。

客5 豚と牛、どっちが多く積めるかと言われれば、牛の方が積めます！

男1 それはなぜですか？。なんで今か今かなのかわかりませんし、しかもあなた、答えまで言つちやつてますからなおさら訳がわかりません。

客5 わかりました！

男1 (女に) あのですね、その、奇跡的な話なんです、私達こんなに人が居て、誰も携帯電話を持ってないんです。なので助けを呼ぶ事も出来ないんです。あなたが、あなただけが頼りなんです。だからお願いします！もうほんのちよつとしたスペースで結構ですので、私だけでもどうにか一つ。

男2 あ、

男1 君はダメだよ。君ほど信用できない人間は居ないんだ。

男2 お子さんがいるみたいですよ。

男1 え？

男2 フロントミラーに写真が飾ってあります。

男1 あ、ホントですね。うん、だからなんだ？

男2 女手一つで幼い子供を育てるなんて並大抵の事ではありません。

女、子供の写真を手に取る。

男1 なんだ君は、まるで女の全てを分かっているかのような発言しやがって。君の魂胆は判つてるんだからな、そうやってこの方に取り入って自分だけ助けて貰おうとしてるんだろ、そうはさせるか。

男2 運送屋さんにとつて納期に遅れるのが一番の損失なんです。今こうして通せんぼをされては納期に間に合わない。そうなるとう信用を失つてしまいます。同時に仕事も失つて、子供を育てる事が出

来なくなってしまうんです。

男1 君は何が言いたいんだ？

男2 この方が乗せたくないと言っている以上、このまま行かせてあげた方がいいと思うんです。

男1 せつかくのチャンスなんだぞ、良く言えるなぞうという事。君はいいんだよいつ死んだってき、私には、そつだよ、私にだつて家には妹が一人居るんだ。

男2 妹が？！

男1 何を驚いてるんだ、

男2 妹が？！

男1 いいじゃないか妹が居たつて。もう高校生になる。私達兄妹は幼くして両親を亡くしてしまつてね、

今まで私が妹を育ててきたんだ。私が居なくなつてしまつと妹は一人ぼっちになつてしまつたよ。(女に) だからお願いします！荷台を開けさせて下さい！

男1、頭を下げる。

客2 (手を挙げて) はい。

男1 すみません、もうひと押しのところなんです。

客2 お幾つですか？

男1 私ですか？

客2 トラックの運転手さんです。

男1 バカですか、失礼じゃないですか初対面の方に歳を聞くのは。ただでさえ機嫌悪いんですから。

客2 …。

男1 あのお、失礼ですけど、お幾つですか？

女 … (時計を見る)。

男1 わかりました。(客2に) 18です。

客2 18?!

男1 はい。

客2 18?!

男1 それがなんですか、これで気が済んだでしょう？

客5 はい！

男1 はい。

客5 18というのは嘘ですよ？

男1 当り前でしょう。ウィットに富んだユーモアだよ。

客5 わかりました。

男1 あなた歳聞いてどうするつもりだったんですか？

客2 凄く奇麗なので、お若いだろうと思つたんですけど、お子さんが居るといふのでどうなのかなあと。

そうですか、やっぱり18ですか。

男1 …は！

皆、女を見る。

女 …

男1 お、喜んでいらつしやる！君、グッジョブですよ。さあ皆さん乗りましょう荷台に！

女 え、え…?!

客3 あの、

男1 なんです？

客3 18な訳ないじゃないですか、どう見ても。

男1 軽はずみな事言うんじゃないよ、君はいつもそうやって口を滑らせて人を不快な気分にする。直したまえぞういうの。

客3 だつてそんなただの褒め殺しじゃないですか、それこそ気分悪くさせるだけです。

男1 じゃあもうわかつたよ、君は乗せない。

客3 え!?

男1 さ、皆さん乗りましょう！

客3 え、ちよつと！

女 あ…

男1、荷台を開ける。

男1 …なんだこれは、空っぽじゃないか！

客3 僕も乗せて下さい！

男1 君はダメだよ、もうあの方が怒つてらつしやるから。

客3 あの人は何にも言っていないじゃないですか。

男1 後でちゃんと助けに来てあげますから。

客3 そんなの信用出来ません。ちよつと！

男1 ほらすぐそういう事言う。君の言う事はいちいち不快なんですよ。さ、さ、皆さん早く乗りましよう！

客3 そんな、ちよつと！

皆、荷台に乗り込む。

客3 僕も乗せて下さい！人だなし！

男1 うるさい！君が乗ったら我々も降ろされてしまうんですよ。

「ガシヤン！」 男1、荷台のドアを閉める。

男1 じゃあお願いしましす！

女 …あ、ああ。

「ぶーん」 走り出すトラック。

客3 人だなしー！！

客3、置いて行かれてしまった。

場所がスクロールするように、客3の方が遠くへ消えていく。  
トラックの荷台では、

男1 いやあ、助かりましたねえ。一人の犠牲で済んでホント良かったと思います私。

男2 会社には内緒にしておきましょうね。

男1 なんだだよ、君が事故った事はちゃんと報告するよ。

男2 じゃああなたが一人のツアー客を見捨てた事、私も報告しますよ。

男1 わかったよもう、じゃあお互い内緒にしておこうね。私はちよつと、安心したら眠くなってしまっ

た。

男1、暖かさからか、目がトロンとしている。

客4 あのか？

男1 はい、何か？

客4 荷物なんてどこにもありません。

男1 ええ、空っぽでしたね。

客4 だったら私達を乗せるくらい訳ないと思っんですけど…。

男1 まあねえ。

客4 あの方は、意地悪な人です。

男1 まあ意地悪でも良かったじゃないですか、我々は助かったんですから。

客1 はい。

男1 何か？

客1 でも意地悪な人だと思います。

男1 うん、もうあんまりそういう事言わない方がイイですよ。降ろされてしまいますからねさっきの人  
みたいだね。

女、地図を見ながら、必死に運転している。

客5 はい！

男1 なんですか？

客5 窓は無いのですか？

男1 窓は無いみたいですね。

男2 トラックの荷台にはたいてい窓はありませんね。

客5 わかりました。

男2、荷台の中をウロウロ歩いている。

男1 君もほら、何をウロウロしてるんだい、じっとしてなさい。



男2 これ、どこ走ってるんでしょう？

男1 どこだっていいじゃないか、君が心配する事じゃない。

男2 変なところに連れて行かれなきゃいいけど。

男1 君よくそういう事言えるよね。ねえ、わかってる？君のせいでこんな目に遭ったんだからね。

男2 しかもさつきからひどくノロノロ運転だ。

男1 安全運転と言いつて。

男2 走っても追いつけるくらいスピードですよ、これはきつと。

男1 あのね、本当に運転が上手な人は、逆にスピードを感じさせないものなんだよ。君以外の運転手の時はいつも思っね私は。

客2 はい。

男1 どうぞ。

客2 私もそう思います。

男1 でしょうか？

客2 トラックの運転手というのはほとんどが男です。その中で対等に渡り合っているという事は、相当な技術があるのだと思います。が、それも私の言う事なので、

男1 いやその通り！あなたの言う事は大抵当たってます。私の思うに、この運転手さんは、日本で一番速いトラック運転手なんだと思いますね。日本一速い女のトラック野郎、「日本一速いトラックメロウ」とはまさにこの人の事です。

男2 できますね。

男1 もう止めてよ。私に話しかけないで。私はもう眠る寸前だという事くらい見たらわかるよね。ちょっと休憩しましょうよ皆さん。

「ガタガタガタ…」 皆揺れ出す。紙相撲のように。

男1 お、お…？

客5 は、はい！

男1 はい。

客5 ひびく揺れます。

男1 はい、知ってます。私も今体験してますから。

客5 これは、震度いくつですか？

男1 地震じゃありません。

客5 わかりました。

客4 あの、

男1 どうぞ。

客4 こんなに揺れていたんでは上手く喋れません。

男1 そうですね、じゃあ黙っていきましょうか、舌噛みますからね。

客1 声まで揺れます。

男1 ええ、そうなんですよねえ。

客1 ワレワレハウチユウジンダ。

男1 ああ、そうなんです。私は地球人ですけどね。

客2 はい。

男1 どうぞ。

客2 ワタシモチキュウジンダ。

男1 そうなんです。

男2 これでも、日本一速いですか？

男1 速いよ、速すぎるくらいだよ。

「ガタガタガタ」音、ここで止まる。

男1 あ、やっと揺れが収まった。

客5 あの！

男1 はい？

客5 おえー…（吐く）。

男1 わ…き、君ねえ

客5 気持ち悪いです。

男1 あーもお…。すいません。

男1、荷台の壁を叩く 「ドンドン、ドンドン！」

女 ……ん？

「ギキー」 止まるトラック。

男1 荷台の扉を開け、降りてくる。

男1 あのお、すいません、ちょっと休憩してもいいですか？

女 ……あ、え？

男1 ちよつと一人、吐いてしまったので、

女 え…？！

男1 荷物は、大丈夫そうなんですけどね…、荷物はね。

女 運転席を降りて荷台を確認する。

客達も降りてきて、

客5 (女に) 荷物なんかどこにも無いじゃないですか！と言ってましたこの人が。

男1 ちよつと、私は何も言っていないじゃないですか。こいつですよ吐いたのは！

客4 あの人は、意地悪なんじゃないかとも言っていました。

男1 それはあなたでしょ！

客1 この人は宇宙人だそうです。

男1 それは君がふざけて言ったんだろ。

客2 我々は地球人なんですけど。

男1 コレ！みんな勝手に喋らない！なに急に喋り出してるんだよ。私のトラックメロウと勝手にコンタ

クト取らないでくれる？

男2 なんか凄い揺れましたよね。

男1 おい、なんでそんなにフレンドリーなんだ君は。道無き道を進んで下さってるんだよ。文句あるな

ら降りたまえ。

男2 この人が、あなたの事を日本一速いトラック運転手だと言っているのですが、それは本当ですか？

男1 バカ、何を言ってるんだ。明らかに日本一速いじゃないか。気安く喋りかけるんじゃないよ。

男2 日本一速いって、どつう事ですか？

女、申し訳なきでつに、地図を開く。

男1 日本一速いってどつう事って、そのまんまじゃないか。日本一速いんだから、日本一速いんだよ。

でも実際日本一速い人は自分の事を日本一速いなんて言わないものだろう？あんまりトラックメロウ様を困らせるんじゃないよ。

女 うーん…

男2 どうもこの人は、自分の事を速いなんて思っていないようなんですが。

男1 それはあれだよ。トラックメロウ様は自分で運転してるんだから、体感速度はそんなに速くないんだよ。でも周りで見ている人は速く見えるんだよ。

男2 はあ。

男1 という事はつまりアレだよ、相対性理論ですよ。

男2 おつ、難しい言葉が出てきましたよ。

客1 座りましょう。

客達 体操座りで男1を囲む。

女、時計を見たりしている。

男1 つまりですね、えー、このトラックはですね、物凄い速さで走っているんです。そうするとですね、

その、速い乗り物に乗っていると、時間がゆっくりになるんですな。

客2 それはつまり、未来に行けるといふ事ですか？

男1 そういふ事ですね。

客4 え、このトラックはタイムマシンなんですか？！

男1 そういふ事ですね。

男2 普通に、「ISUZU」と書いてありますけど。

男1 カモフラージュだよ。「ISUZU」の「I」はタイムマシンの「I」だよ。

客4 凄い！タイムマシンに乗ったんですね私達

男1 ポイントはあの揺れです。

客4 え？

男1 あの揺れは、音速の壁を突破した時の、衝撃ですよ。

客2 音速の壁？

客1 マッハですか？

男1 そう、マッハです。

男2 荷台で感じたスピードは、時速20キロくらいだったんですけど。

男1 それはマッハ20です。

客達 マッハ20？

男1 そうです、もう凄く速いです。

客5 はい！

男1 どうぞ。

客5 マッハ文朱という人を知っています。

男1 それは昔の女子プロレスラーですね。今の若い人だと知りません。

客5 わかりました。

客1 タイムマシンって、光の速度じゃないと出来ないんじゃないんですか？

男1 そうですね、だからマッハ20は、その途中ですね。

男2 スピードメーターは普通の奴みたいですが。

男1 もうそんなものはあっても同じなんですな。スピードメーターも、マッハとか言われちゃったら、もう計るのもバカらしいって感じですよ。

客4 なるほど。

客1 しかし、そんな速度で走ってたら、日本なんかあつという間に通り過ぎてしまっじゃないんですか？

男1 まあね。

男2 ここはどこですか？

男1 外国ですかね。

客2 光の速度は、一秒間に地球を七周半するというのは本当ですか？

男1 私もそういう話は聞いたことがあります。

男2 という事はここはどこですか？

男1 外国ですかね。

客1 マッハ20と光の速度、どれくらい違うんですか？

男1 そういう難しい事はわかりません。

客4 マッハ20は時速にすると何キロで、光の速度は時速何キロなんですか？

男1 あなた達マッハ20に「だわり過ぎ」です。もうマッハ20の事は忘れて下さい。私ももうマッハ20とか良くわかりませんから。

客5 そうか、私分りました！（立ちあがる）

男1 は？

客5 このトラックの荷台には、荷物なんて載ってないじゃないですか。しかし本当は、荷物が無い訳じゃないんです。

男1 はい？

客5 ここには、見えない荷物がたくさんあるんです。それは形にならない思いの詰まった荷物です。の中には重いものも軽いものいろいろありますがそれぞれは同じ大切な思いの詰まった荷物なんです。例えばある時、青森に住んでいるおばあちゃんから、東京の孫にりんごを送りたいというので、この人が運ぶ事になったとします。しかし指定された住所に行ってみると、そんな場所はどこにも存在しません。青森のおばあちゃんに電話してみると、そのおばあちゃんはまだ居ませんでした。つまり、この人がりんごを運ぶ間に、外の世界はグングン進んで、この人だけがりんごを届けようと走っていたのです。いつしかりんごも腐ってしまつて、荷台にはもう何も乗ってはいないけれど、「おばあちゃんが孫にりんごを届けたい」、その思いだけは残っている。形は無いけれど、そうやって重い思いの荷物が幾つもあるんです。この人には、その荷物が手に取るように見えるんですよ。いつまでもここに。

男1 え？

客5 だから私達を乗せる事を躊躇したんですね。

男1 じゃあこの方は、そんなもの無くなつてしまつた荷物を、未だに運んでいるんですか？届ける先も分からないまま？

客5 荷物を届けるだけが運送屋の仕事じゃないんです。

客1 思いを届ける、それが運送屋の仕事…。

男1 皆さん聞きましたか！この方は、運送屋の鑑のような人ですよ。

客達 感心して女を見る。

女 へ…？

男1 はっ！皆さん周りを見て下さい。そう言われてみると景色が、なんだか何年も未来のように感じませんか。

皆 キョロキョロと周りを見る。

男1 俺等は今、時空を超えたんだわ！

客2 ということはここは未来のあの場所なんですね！

男1 うん、そうかもしれないね。

客1 アスファルトももうありません。

男1 そりやそうですよ、何年経ったと思ってるんですか。

男2 何年ですか？

男1 もうだいぶだよ。

客5 見て下さい、森は昔とほとんど変わらない様子です。

男1 そうです、森の木々は何千年と生き続けるんです。

客5 これがはるか昔から生き続けているという木ですか。

男1 森はそうやって地球を支えてくれてるんですね。我々人間は自然に生かされているという事です。

客2 どこかにバスがあるかもしれない。

客1 しかしもう錆ついてボロボロになっているでしょう。

男1 危ないですよ。もう人類は絶滅した後かもしれません。

客5 人類はどうなりましたの？

男1 皆さん、ここからは慎重に行動しましょう。

客4 いつどこから得体の知れない生物が襲ってくるかもわからない。

客1 添乗員さん私、凄い物を発見しました。

男1 お、いいよ。みんなだんだん自由に喋れるようになってきたじゃないですか。その調子ですよ。

男2 凄い物ってなんですか？

客1 あそこに居るのは、あの時の彼では？

男1と客達 え？

見ると、客3が息を切らして追いかけてきた。

客3 …良かった、追いついた。はあー。あ、もしかして待っていてくれたんですか？ありがとうございます！どう

もありがとうございます！

客3、握手をする。

客5 冷たい…。

客3 あー、あったかい。

客5 びっくりするほど冷たいです。

客3 それはそうですよ、ずっと外に居たんですから。でも良かった。助かった。もうこんな冗談はやめて下さい。

男2 さて、これはどう説明しますか？

男1 うん、世の中にはこういう不思議な事もたくさん起こるんだ。タイムマシンを発見した我々には、もう何が起ころうとも不思議ではないがね。

客4 つまりこれも、一つの思いの形なのですね。

男1 そういう事ですね。

客4 過去の彼の思いが残っている姿、それが私達には見えている。

男1 ちよつと待って、ということはずまり…。

客4 あんまり見ない方が…。

客3 でも雪が止んだから良かったです。ちよつと寒くなりましたから。

客2 寒くないのは当たり前ですよ…。

客4 会話しない方が、彼の為ですから。

男1 そうだよ。もう見ちゃダメだよ。情を移すと奇ってくるよ。

客5 手が…、凄く冷たかったです。

男1 洗った方がいいね、塩水で。

客4 彼はまた、自分が白骨化している事に気づいていないです。

客1 白骨化？！

男1 そりや何年も経ってるんだから、そうですね。

男2 何年ですか？

男1 もうだいぶだね。

皆、客3を見る。

客3 何ですか？そんなにジロジロ見ないで下さいよ。

男1 はいみんな、知らんぷりして！

客3 え、またそんな事言うんですか？お願いしますよ、乗せてって下さい。もう軽はずみな言動は慎み

ますから。ね？

男1 さあみんな行きましょう、次の時代へ。

客達 おー！

皆 荷台に乗り込もうとする。

客3 時代ってなんですか？

男1 (女に) じゃあ、お願いします！

女 あ、ああ…、

女 運転席へ。

客3 ねえ、乗せてよ。同じツアーの一員じゃないですか。

客3、客1の腕を掴む。

客1 触るな！

客3 ……

客1 君はもう…、白骨化しているんだよ。

客3 …え？

男1 あーあ、

客3 白骨…？

客1 白骨化している事に気づいていないのは、君だけなんだよ。

客3 …白骨化ってなんですか？

男1 ほらあ、いきなりそんな核心ついたらダメですよ。混乱するだけですから。もっと、オブラートに包んでいかないと。

客3 何ですか？どういいう事ですか？

客2 白骨っていうか、骸骨だよ。

客3 骸骨？

男1 うん、あんま変わってないからさそれ。

客5 骸骨と白骨、どう違うんですか？

男1 まあ骸骨でも白骨でもどっちでもいいじゃないですか、内緒にしてあげましょう。

客3 え、何言ってるの？

客1 お前だよ。お前はもう、骸骨なんだ。お前だけが、骸骨なんだ。

客3 …骸骨？

男1 うん、だからね、彼は今、自分を骸骨とは思っていないんだから、いいじゃないですかそれはもう。

客5 なんだか私の手が、骨臭いです。

男1 ほら、もうやはいよそれ。

客5 えー…！

客5、客2の服で手を拭く。

客2 え、ちよつと！骨が移る、骨が！

客2から逃げ惑う一同。

男1 (咳払いをして) エー皆さん、骨は移らないですからねー。骸骨に触られても、骸骨にはならない

ですから、慌てない。

客2、男1に触る。

男1 わーちよつと！ナシナシ、俺はナシだつてばー！

男2 はい今、あの人が骨です。

男1 もおー！

男1、みんなを追いかける。

「あはは、あはは」と鬼ごっこを始める一同。

客3も一緒に笑って参加している。

客1 怖わー、骨、恐わあ。

客3 あははは、えー？誰？誰が骨？

男1 (急に真顔で) お前だよ！

ムードが一変する。

客3 …え？

男1 お前以外誰が骨なんだてパーカ。

客3 …ちよつと待って下さい。なんで僕が骸骨なんですか？ねえ？どこが骸骨？…肉が見えますよ。服も着てる。それなのに、僕は骸骨なんですか？

男1 …思い出なんだよ。

客3 思い出？

男1 君の思い出が、鮮明に蘇っているだけだ。

客3 うん。

客3 …思い出？

男1 さあ皆行きましょう！

客3 僕も乗せて下さい！

客1 お前はダメだよ。

客3 なんて？助けに来てくれたんじゃないの？僕は骸骨じゃないです。いたって普通の男です！

客1 お前はもう骸骨なんだよ！

客3 違います！認めません！

男1 君が認めようが認めなからうが、君は骸骨なんだよ。

客3 僕をちゃんと見て下さい！どこが骸骨なんですか？

男2 まあ見た感じ白骨化はしてないよ。

客3 でしょ？

男1 ああ、見た感じ白骨化してたら、俺達は初めからお前に喋りかけてないから。

客3 …え、

男1 最後にお別れの挨拶をして貰えるだけでも有難いと思えよ。じゃあさようなら、骸骨。

客4 じゃあね、骸骨。

客5 ガイコツ♥

客3 …骸骨ってなんだよ。僕は骸骨じゃないよ！

客1 骸骨！ガイコツ！

客2 骨！骨！

客1 パーカ！

客2 骨！

男1 おい、ただの悪口みたいになってるから。ヤメときなよその辺で。

男2 あの、

男1 なんだよ？

男2 過去へは行けないんですかね？

男1 …過去？

男2 タイムマシンだったら、過去へも行けるんじゃないですか？

男1 まあ、それは確かに、そうだけだね…。

男2 トラックメロウ、どうですか？

女 (地図を見ながら)…え？

男1 いや、しかしそれは…。

男2 なんですか？

男1 バックしなくちゃいけないんじゃないのか？

男2 ああ、そうですね、きっと。

男1 バックはダメだよ。バックはしないと行ってたじゃないかトラックメロウ様が。

男2 でも、過去へ行けるかもしれない。

男1 バックは嫌だと言ってるんだ。さ、行きましょう！明るい未来へ。

男2 我々が事故を起こす前のこの道に、戻れませんか？そうしたら彼も、骸骨にならずに済むでしょ。

客3 …え？

男1 お前は…、なんだ？

男2 どうですか、トラックメロウ、出来ませんか？

女…え、

客4 あのお、

男1 はい。

客4 …残念ですけど、それは無理だと思います。

男2 どうして？

客4 私、ドラゴンボールを全巻読んだんです。

男1 なんですかいきなり？

客4 ドラゴンボールによると、世界はパラレルに存在しているそうなんです。だからたとえ過去に戻っても、骸骨になってしまった今の彼を元に戻すことは出来ないと思います。私達に出来るのは、過去に戻つてもう一人の彼を骸骨にならないように助けてあげる事だけ。二つの世界に、骸骨にならずに済んだ彼と、骸骨になってしまった彼。ふたつの骸骨が存在するだけなんです。

客3 …二つの骸骨ってなんですか？

男1 骸骨になつてしまった君は、骸骨のまま、か…。

客3 あなたが僕を置いてけぼりにした癖に…

男1 残念だが君は、骸骨のままたそうだ。

客3 …僕は、骸骨？

男1 踊れ！骸骨なら踊れ！

客3 …お、踊る？

皆 手拍子をする。

皆 ほーね、ほーね、ほーね、ほーね。

客3 踊れるかよそんな手拍子で！

男1 君ね、踊らなかつたらもう一人の骸骨にならずに済んだ君も、助けてあげないからな。

客3 なんですかそれ…。

男1 (客達に) ねー？

客4 もう一人のあなたも骸骨決定ね。

男1 踊るんだよ、もうこうなつたら踊るしかないだろ。もう一人の君を助けたくはないのか？

客3 …、(拳を握り締め)わかりました。踊ります。…だからせめて、もう一人の僕は助けてあげて下さい。僕が踊る事で、もう一人の僕が骸骨にならずに済むのなら、僕は骨が折れるまで踊ります。

男1 初めからそう言えば良かったんだ。全く骨が折れる奴め。(客達に) ねー？

客達 …。

男1 さあ、踊れ。

男2 もういいんじゃないですか。

男1 え？

客1 そうですね、もう充分です。

客3 …え？

男2 お願いします、トラックメロウ。

女 …？

男2 どうか、一度だけバックして貰えませんか？

客1 私からもお願いします！

客2 いや私からもお願いします！

客4 私からも。

客5 私もお願います！

男1 皆さん…。

女 ……？

女、ギアを入れる。

「び、び、び、バツ…ます。び、び、び、バツ…す…」 途切れ途切れのアナウンス。

男1 トラックメロウが、トラックメロウがバックして下さい…。良かったな、君のその思い、もう一人の君にきつと届けるよ！

客3 …ありがとう。どうも、ありがとう。

客5 トラックメロウが運ぶのは、荷物だけじゃないのです。

男1 かつちよいい、なんちゅうかつちよいい台詞だ！

男1、涙を拭きながら荷台に乗り込む。

男1 さあみんな乗って、過去へタイムスリップしますよ！

客3以外、荷台に乗り込む。

客3 あ、あの！

男1 なんだ。

客3 どうか！あの時の僕によりしく言つといて下さい。人の反感を買うような事を軽はずみに言つたら、なんとなくの発言は命取りになると。いつも、感謝の気持ちを忘れずに！

男1 …成仏しろよ、骸骨！ガイコツ！  
客達 ほねー！

「ぎいー、ガチャン！」 男1、荷台のドアを開めた。  
客3、トラックに背を向けて

客3 …泣くもんか。泣いたって僕は骸骨。涙なんか出るもんか。

客3、元の来た方へ走りだす。

「ぶおーん！」 女、不安そうに振り返り、バックで走り出す。

荷台では、皆涙を流している。

やがて、「ガタガタガタガタ…」

男1 さあ、タイムスリップしますよ！

また紙相撲のように揺れる。

途切れ途切れのアナウンスが、「び、び、バツ…ま…。バツ…す…」。

ガタガタが止まると、

男1と客達 おえー…（吐く）。

男1 …さ、着きましたよ。

皆、荷台から降りてくる。

バスの姿がある。

客1 …元の道だ！

客2 バスがあります！

男1 ほんとですね、戻ってきましたね。

男2 …。

男2、バスの周りをウロウロしながら、ポケットに手を入れる。  
と携帯電話が出てきた。

客4 雪は、降る前なんでしょうか？

男1 そうですね、まだ降ってませんね。

客2 バスには誰も乗ってません。

客5 どこに行ってしまったんでしょう私たちは

男1 皆さん、あんまりウロウロしないで下さい。なにせ我々は初めて過去へタイムスリップしてきました、過去の自分に遭うとどうなるかわからない。

客4 そうですね、そういう危険がありますよ。

男1 おい君、バスに近付いちやダメだったら。

男2 事故を起こす前だったら、エンジン掛かるんじゃないですか。

男1 おー、そうだそうだ。

客3、息を切らせて走って来た。

客3 ちょっと皆さん！またこんな所に居るんですか？もう早く行って下さい！僕の気が変わらないうちに。

男1 何を言ってるんだ、君を迎えに来たんじゃないか。

客3 …え？

男1 いろいろ反省してね、我々も。

客1 同じツアーの仲間じゃないですか。行きましょう、一緒に。

客3 …え、いいんですか？僕も乗っても。

客2 イイも何も…、そうそう、もう一人の君が、君によろしくと言っていました。

客3 もう一人の、僕…？

客4 良かったですね、あなた思いのあなたが居て。

客5 あなたはあなたの事を凄く心配していました。

客3 …え、じゃあもしかして、もっ？

男1 君の思い、ちゃんと届けましたから。

客3 そうなんですか…、もっ一人の僕も、僕の事を…。僕は…、僕のことなんか誰も思っていないと思



っていました。そうか、僕が居たのか。僕がもう一人の僕を考えるのと同じように、もう一人の僕も僕の事を考えてくれていた。

客1 …私ね、これからは私の事を考えるのと同じように、あなたの事を考えてみようと思います。

客2 私も、私の事を考えるのと同じように、あなたの事を考えます。

客4 私も、あなたの事を考えます。

客5 私も考えます。

客3 …ありがとう！僕も、その何倍もあなた達の事を考えて生きて行きます！みんなどうもありがとう！  
う！

男1 …うん、イイ仲間じゃないか。そうだよ、そうやって皆が皆、自分の事のように相手の事も考えることが出来るようになったら、世界はもっと平和になるよ。それがわかっただけでも良かったよ。ね、良かったねえ皆。さあ行こう！もう飛騨高山とかどうでもいいじゃないか。木彫りの熊なんてちっけな事言つてないでさ、ナマの熊でも探しに行こうよ、皆で、ね！

客達 はい！

女 …あ、あのお？

男1 あ、ありがとう！さいましたトラックメロウ。そしてありがとう！トラックメロウ。

男1と客達 頭を下げる。

女 あ…、え…？

男2、ペコリと頭を下げる。

女 あ…、ああ、じゃあ…。

「ふうーん、ぶんぶん」 女、去って行った。

男1と客達 ありがとう！ありがとう！トラックメロウ！

力一杯手を振り、女の去った方を見送る客達と男1。

男2 …行っちゃった。

男2はバスの運転席に座っていて、エンジンを掛けてみる。

「キュルキュルキュルキュルキュル、キュルキュルキュルキュル」

男1 さあ行こう！熊を探しに！

客達 おー！

男1と客達 「くーま、くーま」と言いながら、行進していく。

男2 バカだなあ、あの人達。

男2、空を見上げて深くため息を吐いた。

また雪が降って来たのだ。

〜終〜

【上演記録】2012年8月3日～5日 座・高田寺1 夏の劇場09 日本劇作家協会プログラム 〔東京公演〕

8月31日～9月1日 長久手市文化の家 森のホール 長久手地域演劇祭 〔愛知公演〕

9月15日～16日 ソウル（D・FESTA）／19日～20日 清州 〔韓国公演〕

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)